



## コース デジタル庁「YOSS」検討の場に

### 「雪割草になる予感」

それは、雪割草の春を予感した瞬間だったかもしれない。

1月21日あさ、デジタル庁(東京都千代田区)で開かれた「こどもに関する情報・データ連携 副大臣プロジェクトチーム」(副大臣こどもPT)の第2回会議。テーマの1つは、地方公共団体におけるデータ連携の実証に係る調査研究事業の公募について、だった。

デジタル庁、内閣府、厚労省、文科省の副大臣が出席。会議では、事業採択の参考(先行)事例として、大阪・能勢町の学校版スクリーニングが紹介された。

「大阪府立大学の先生がリードされました」

会議で言及された「先生」は、大阪府立大学教授の山野則子さん。学長補佐で、スクールソーシャルワーク(SSW)評価支援研究所の所長。「雪割草の春を予感したのでは」と思われた、その人だ。

続いて、府立大学で研究・推奨している、AI(人工知能)を活用するスクリーニングシステム「YOSS」の概要が示された。全国約20の自治体と5年間の契約を結び、現場の入力によってデータを集積し、AIに学習させている。

能勢町では、3年前からYOSSを活用している。スクリーニング会議を経て、SSWなどの専門家が参加するチーム会議を開催。遅刻や早退が70%も少なくなった。指導に熱心な自治体でも10%ほどの好転率なので、YOSSのすごさがわかる。その精度を増すのがAIだ。

2月4日、デジタル庁は公募を開始。



### いのちと蠢く核

この国にも繋がる冷徹な現実…そんな思いが、涙みをもって化け続けている。突き刺さる単語が、核だ。侵略国は、1961年秋にツァーリ・ボンバ(爆弾の皇帝)をつくりだし、史上最大最悪の水爆実験を行った。その現代の為政者が、再び皇帝と呼ばれたかのように、核保有をむき出しにし、原発も略奪した(写真左=NHKテレビ)。1945年夏、2つの都市で人類初の戦略核が使われて77年。青い星は、蠢く核にグラリと揺れた。「死にたくない」と言った幼子(写真右=NHKテレビ)の言葉が、今を切り取っている。世界の善に連帯した、ソーシャルワークの俊敏な動きも、強く求められている。(2022年3月1日正午時点)

2月10日の事業説明会でも、「山野先生」や「YOSS」が紹介された。

「積み上げてきた成果が、首相直轄のデジタル庁にピックアップされた。なんとかここまで来た、という思いです」と山野さん。

「副大臣こどもPT」が主導していく予算は、7億3000万円。子どもに起きる様々な問題を、教育や福祉などの部門の違いによる壁を越えて、まずデータから連携する。今春から事業を開始し、新設される「こども家庭庁」へ繋いでいく方向だ。

締め切りが「2月28日まで」とあまりに急であり、現場の対応が追いつきにくい公募となった面は否めず、残念だ。山野さんは「一進一退です。今後も、子どもの最善の利益を第一に考えて、自治体のみ

なさんと手を携えていきたい」と話した。

YOSSの鍵を握るのは、SSW。子どもの最善の利益を考慮して、福祉の制度やサービスを教育部門にもたらす、そんな役割を担う。

文科省がSSW事業を導入したのが2008年。それから約15年、山野さんはSSWの法定化、配置の拡充、スクリーニングの実践、AI開発など、幾多の困難に向き合ってきた。そして今、デジタル社会の新たな流れの真ん中にいる。

雪が溶けて春を告げる…繰り返すが、そんな雪割草を連想させる「歩み」ではなかったか。子どもが主演の実践研究がさらに進む、と確かに思う。

(檸檬新報編集長 平田篤州)



## 大阪府立大学 厚労省委託研究

# コロナ禍で平時の潜在リスクも見えた

変異株オミクロンまで第6波。この2年余、「新たな日常」は日々、次の「新たな日常」に変わってきた。山野則子さんらが主導した厚労省の委託調査「コロナ禍における子どもへの影響と支援方策のための横断的研究」は、昨年4月の発表以来、大きな反響を呼んできた。ワクチンも開発されていない「先が見えない第2波後」の調査だったが、1000人規模のセミナー（3面）ができるなど、今もその有用性は、輝きを増している。（コロナ取材班）



山野則子さん(右)。YOSSスクリーニングを活用した研修を開いた(2021年12月10日、大阪・難波)

調査は、2020年10～12月に実施。保護者調査、子ども調査、公的支援機関調査の3分野を対象にした。全国の親子約3600人のほか、220カ所の児童相談所・一時保護所、1741自治体の福祉部門や教育委員会などから回収率50%前後で回答を得た。この時点での最大規模の横断的調査であった。

「公的支援機関の実態は、個人情報保護の問題もあり見えにくい。マスメディアも取材しにくい。コロナ禍になって1年、ベールに包まれた『声なき声』を拾うことには意義がある。そんな思いから、児童相談所なども調査対象にしました」（山野さん）。

**調査の特徴** 可視化されにくい子どもにかかわる公的機関における支援の実態に関して、長時間の経緯を網羅的に把握することを目的としたのが特徴。知られにくい機関調査（教育・保健・児童相談部局への横断的調査）を、子ども調査、保護者調査と併せて読み解けることがポイントだ。コロナ前の2017年に行った「大阪府子どもの生活に関する実態調査」（10万人調査）の項目を多く活用した。

**協働した人々** 調査は、山野さんが研究代表者をつとめ、兵庫県こころのケアセンターの亀岡智美副センター長・研究部長、花園大学の和田一郎教授、会津大学短期大学部の鈴木勲准教授、大阪府立大学の木曾陽子准教授、伊藤ゆかり研究員、小倉康弘研究員等が協働して実施した。

### メモ 新型コロナウイルス

新型コロナウイルス感染症は、COVID-19（コビッド・ナインティーン）と呼ばれる新型肺炎だ。「Coronavirus Disease 2019」の略で、「2019年に確認されたコロナウイルス（Coronavirus）による病気（Disease）」という意味。最初に確認されたのが2019年12月だったので、「2019」となっている。

## 保護者・子ども調査

コロナ感染の度合いによって、全国を3つの地域に区分。年収によっても分析できる方法をとった。経済状況や不本意な在宅生活で、家庭内不和が起きるなど、「新しい日常」は、保護者や子どもに大きく影響していた。

困りごとを見ると、保護者の4～5割が、子どもの「食事の状況」（就学前）や「生活リズムの乱れ」「学業の遅れ」などを心配していた。子どもも、同じようにこれらの問題で困っていた。

### 保護者の4人に1人が「心身負担増」

保護者調査では、家庭の中で精神的・身体的・その他の負担が増えた合計の割合は約25%であり、4人に1人が負担を感じていた。コロナの感染がひどい地域ほど、多かった。

### 子どもの9割が「ストレス」

子ども調査では、なんらかのストレスを抱えている子どもは9割弱。そのうち、3割強の子どもが高いストレスを抱えていた。

保護者の精神状態が不安定になるほど、子どものストレスが重くなり、経済的に苦しい家庭ほどストレスレベルは高かった。

# 虐待防止シンポに約1000人

山野さん基調講演「コロナ禍における子どもの家庭の実態 ～対応を考える～」

感染状況が予断を許さないなか、2月27日に虐待防止のシンポジウムがオンラインで開かれ、山野則子さんが基調講演した。

主催は、特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク。山野さんは、厚労省委託調査をもとに、今後の課題などについて講演した。

全国から定員900人を超える申し込みがあり、急遽、開催後のオンデマンド配信を決めた。基調講演後、NPO法人こどもソーシャルワークセンター（大阪市）代表の幸重忠幸さんら3人が「深夜のネットアウトリーチ」「母子保健」「児童相談所」などのテーマで報告し、意見交換も行われた。

「学校では元気に見えるだけで、実は子どもたちはストレスを抱えている。そんなことが表れた数字です。調査後、子どもの自殺が増えた統計が発表されましたが、『見えないストレス』が形になったとも思えます」（山野さん）。

**PTSDの症状 93.1%**  
**可能性高い 17.8%**

コロナ禍で、トラウマとなりうるできごとを体験している子どもは101人。このうち、何らかのPTSD（心的外傷後ストレス障害）症状があった子どもは93.1%にものぼり、PTSDの可能性が高いとされた子どもは17.8%だった。

コロナ禍が、子どもの心に大きな影響を及ぼしたと推定でき、「親の勤務状態の変化」が、親のメンタルヘルスや子どものストレスレベルに有意に影響を与えていることが示された。

**休校解除後に学校に行きづらいつと感じた子ども 3分の1**

学校再開後に、学校に行きづらいつと感じた子どもは3分の1をしめた。

調査後、不登校が増えたことが報告されており、ここでも「自殺の増加」と同じように、コロナ禍での「声にならない子どもたちの悲痛な叫び」が、数字になって表れたと分析できる。

保護者の精神状態が不安定になるほど、子どものストレスが重くなり、登校を躊躇する傾向も。「親の心身がともに健康であることが子どもとの関わりに影響を与え、それが子どもの自己肯定感に影

響して登校意欲につながる」という2017年に山野さんらが行った「大阪の10万人調査」と同じ傾向の結果が見えた。

**年収が高いほどサービス利用**

山野さんが、驚いたことがある。「年収が高いほどテレワークが進み、年収400万円以下だと、テレワークの環境が十分には整えられていない。コロナ禍に伴う給付金などのサービスの利用は、申請主義ということもあって、年収の低い層が利用できていなかった。本当に驚きました」

**公的支援機関調査**

学校や支援機関では、通常、様々な訪問を伴う活動を行っているが、コロナによる自粛によって、余儀なく延期されたり、中止されたりした。孤立しがちな保護者や子どもと会話する機会、勇気づける機会を逃す結果になっていた。

気になる子どもたちをキャッチできず、結果的に見えないところで、子どもたちのストレスが高くなっていくことを放置せざるをえなくなったと考えられる。

「児童相談所では、ゲーム依存の相談、性的な問題、DV（家庭内暴力）に関係する虐待相談が増えています。精神的負担を感じた保護者が多くなり、休校の影響も大きかった。緊急事態宣言中は、訪問などのアウトリーチはできず、動いていなかったと思います」（山野さん）。

4面5面6面「NHKあさイチ出演」参照

## Pinポイントインタビュー

山野則子先生



—改めて調査を終えての思いは  
いかがですか

**山野** この調査によって、これまで誰もが漠然と感じていながら数値で見えてこなかった新型コロナの家庭や子どもへの影響が、明確に可視化されました。しかも、危機的な数値でした。コロナ休校の影響は非常に大きく、学校が抱えていた課題もわかりました。特に、人口当たり感染者数の高位群の地域が直面した課題の大きさが、明らかになりました。

—デルタ株、アルファ株、そして現時点（2022年2月末）はオミクロン株です。学校について

**山野** 学校は勉強するだけの場ではなく、子どもにとって重要な所属、居場所であり、安易に奪うべきではないと思います。デジタル庁の動きを追った1面でふれたように、より多くの学校と連携して、子どもたちひとり1人の潜在リスクの発見に役立つYOSSの活用によって、予防に重きを置いた体制の構築を進めていきたいと思っています。

—今後の課題、支援について

**山野** 支援機関は、平時から、自然災害や新型コロナのような緊急時になっても対応できるような人員体制と支援体制をとれるように備えるべきです。また、今後の政策として、①必要な子どもに活用される貧困関連の制度づくり②YOSSの導入等、子どものリスクを予防的に発見できる仕組みづくり③福祉行政と教育行政の連携を促すデジタル戦略の推進④オンラインカウンセリングなどの導入⑤子ども食堂のネットワーク化など地域資源の積極活用—などを立案し、実践することが求められます。

詳細はこちらへ

大阪府立大学 厚労省調査

検索

# 突然消える子どもたち

## NHK「あさイチ」 山野さん、オンライン出演

NHK 総合テレビ「あさイチ」。2月8日のテーマは、「突然消える子どもたち コロナ禍の家庭で何が」だった。NPO 法人こどもソーシャルワークセンター（大阪市）代表の幸重忠孝さん（社会福祉士）がスタジオ出演、大阪府立大学教授の山野則子さんがオンライン出演した。ゲストのお笑い芸人、バービーさん、キャスターの博多華丸・大吉さんも一緒に考えた。

（コロナ取材班）



「あさイチ」にオンラインで出演した山野さん(左端)。幸重さん(中央)はスタジオ出演した(NHKテレビより)

### 家出とSNS

「10代の行方不明者 **1万2860人**」

画面に、赤い数字が大寫しになった。2020(令和2)年の警察庁データだ。そして、SNSに書き込まれた文字が流れた。

「家出中、誰か泊めてください」

「誰か優しい方、泊めてください。なんでもします」

宿を求めていることを示す文字が、並んでいた。

コロナ禍のなかで苦しむ、17歳の息子と母親のケースが取り上げられた。

緊急事態宣言が出た昨年夏から、息子はスマホのゲームに熱中し始めた。(図1)深夜までSNSやゲームをしていた。

母親は、「いいかげんに寝なさい」と毎晩のように叱りつけるようになった。息子は家出した。

実は、この母子は、認定NPO法人「CPAO」(大阪市)が8年前から定期的にサポートしている。当時、長男は小学3年。離婚の後、母子3人で新生活を始めていた。

理事長の徳丸ゆき子さんは、「コロナ禍で親御さんもいろんなストレスを抱えている」と映像の中で話した。

スタジオで、SNSによる被害児童数のグラフ(警察庁調べ)が、示された。2011(平成23)年に約1000人だったのが2019(令和元)年には2倍の2000人を超えている。

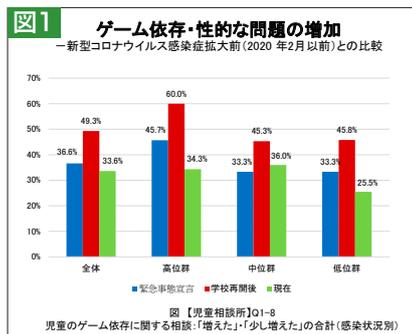
母親はコロナ禍の前には、介護施設のヘルパーなど3つの勤務で生計を立てていたが、コロナ禍で施設利用者が半減、月収は14万円に落ち込んだ。心身ともに調子を崩した。

**母親** ストレスなんですかね。頭痛がひどくて、ひどいときには1週間も続きました。  
**息子** 直接、「うるさい」みたいな感じで言ってきて…疲れているんだな、みたいな感じで思っていました。(母親を)怒らせると面倒くさいというか、ギクシャクした気分が長くなる。それが嫌なんです。

自分の気分を安定させるために…(家を出た)。

**母親** 子どもと一緒に食事できる時間が取ればいいが、どうしても、疲れてしまうと、すぐに寝てしまう。それで私に話せないから、ゲームに…」

「親御さんだけでなく、子どもたちもコロナでダメージを受けていて、大変な課題を抱えている(図2)。手厚くサポートしていくことでしか、子どもたちの思春期の家出の問題などを防ぐことはできないと思っています」



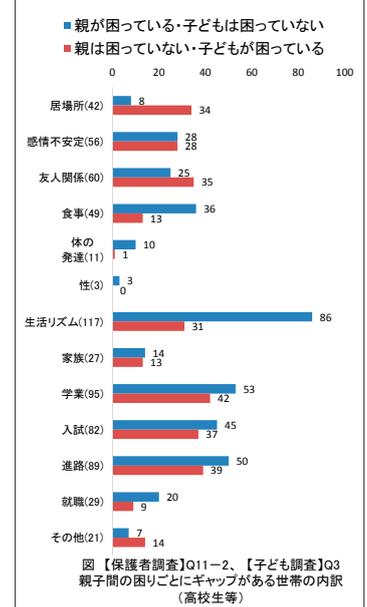
児童のゲーム依存に関する相談

(厚生労働科学特別研究概要版リーフレットより)



子たちの家出の問題は  
NPO法人CPAO理事長の徳丸ゆき子さん  
(NHKテレビより)

**図2 親子間で困りごとにギャップがある世帯の内訳(高校生等)**



親子間の困りごととギャップ  
(厚生労働科学特別研究概要版リーフレットより)

徳丸さんは、こうコメントした。

## 親のストレス

厚労省のコロナ調査では、どうなっているのか。スタジオから、山野さんが呼ばれた。

「山野さん、親が受けるストレスについて教えてください」

スタジオに示された図(右上)を使って、オンラインで説明を始めた。

「収入がなくなる、働き方が変わる、など『仕事の変化』が大きなストレスになっていました。(図3)次に『心身の不調』。テレワークなど、いろんな形で4分の1の親御さんがストレスを感じていました。そして『子どもの心配』。生活リズムが乱れたのではないかと、などと親が子どもたちを心配するストレスです」

## 子どものストレス

続いて、子どものストレスについて聞かれた。

「友だちと会えないなど『友だちの悩み』。次に、学業の遅れや行事に参加できないなどの『学校の悩み』。最も大きかったのは『親のストレス』、体調不良や経済的な問題など様々な親のストレスを、子どもたちが引き受けてしまう…」(図4)

図の描写のように、「親のストレス」が子どもの肩にどんとおしかかり、巨大な子どものストレスになる。山野さんは続けた。

「学校が休校になり、親も仕事なくなり、そんななかで、親の顔色を見て育つ。イライラが、お互いに相乗作用になってしまう。狭い空間の中でストレスが膨れ上がる、というようなことが起きていました」

## 風船がパンパンに

山野さんは、気になる調査結果をあげた。

「休校明けで学校に行きたくなくなった子どもが、3分の1をしめていました。おうちの中で、空間が閉じられて。特に子どもは『家庭での居場所に困っていた』と答えていたが、それに親が気付いていない、という結果でした」

ストレスの風船がパンパンに膨らんでいっている。毎日行ける学校にも家にも、居場所を見つけられなくなった。そこで家を出てしまう、そうなりやすい状況にある、といえます」

方策はあるのですか、と尋ねられて山野さんはこたえた。

「ここまで来ると、親子だけで改善することは難しい。こうなる前に親も子ども気軽に話せる相手・気軽に話せる場所があると良い。相手と話すことで自分が客観化されたり、アドバイスが得られたりします。学校や近所の人も、『あるがままを聞いてあげる相手』になるということ意識していただけたらいいかと思います。(子どもたちは)深い話を求めているわけではありません」

スタジオからは、「SNSやゲームは悪ではない。友達とどこでもつながれます。大人が考えるSNSのイメージと、子どもたち持っているイメージは違うということも考えておかないと…」との声もあがった。

## 親の暴力で家出

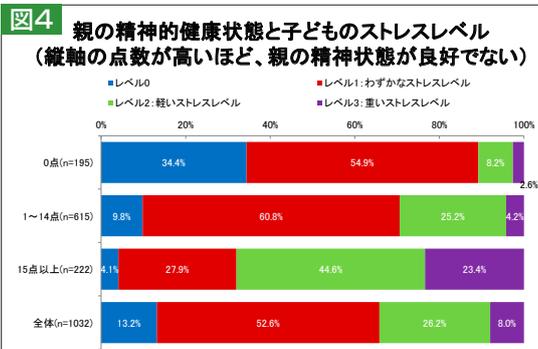
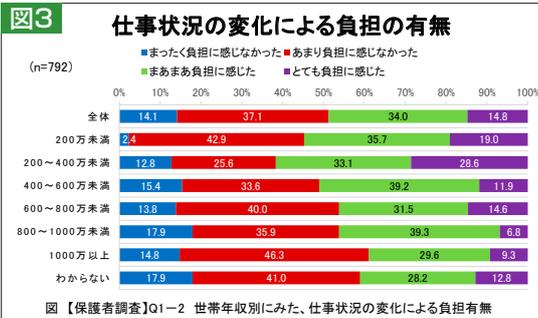
17歳の高校生、ゆきとさん(仮称)は、父親と進路を巡って対立し、家を飛び出した。

「いっしょにいとすべて、つかかってくるので耐えきれなかった」

家を出た当初、ゆきとさんはネットカフェやカラオケボックスを宿泊先にした。所持金の3万円は一週間で半分。住み込みで働ける仕事はないか、さがしたが見つからなかった。

公園で寝泊まりして、寒さに耐えながら夜を明かした。2週間が過ぎたころ、ネットの情報を便りに児童相談所に行った。でも、建物に入るのを躊躇した。

「利用したことがないので、どういところか知らなくて。自分が使っていないとこ



(上)スタジオで示された親と子のストレス関係(NHKテレビより)  
【グラフ上】仕事状況の変化による負担の有無  
【グラフ下】親の精神的健康状態と子どものストレスレベル  
(グラフはいずれも厚生労働科学特別研究概要版リーフレットより)

ろなかどうか…」

そばの駐車場にすわって「声をかけてもらえないか」と思っていた。目があった人もいたが、助けてほしいという心の叫びは届かなかった。猛烈な寒さと空腹に襲われながら、先の見えない不安に襲われた。

「自ら命を絶しても、おかしくなかった」

## スマホが命綱に

その時、頼ったのが SNS だった。

「家出しました。どうしようもないです、泊めてください」

ネット上の見知らぬだれかにすがりしかなかった。

スタジオのバービーさんが言った。

「大人のウミを子どもが全部すっちゃってるんですね」

ゆきとさんを見つけて保護したのが、幸重さんの NPO 法人。その時のゆきと

さんの様子について聞いた。

「スーツケース1個でした。ほんとに疲れていた。あったかい炬燵で横になってもらって、おしゃべりしている中で、大変な生活をしてたことをぽつりぽつりと話しました。家出というと、特別な感情を持たれるかもしれませんが、普通のまじめな子です」

## 夜中の見守りチェック

幸重さんが代表を務めるNPO法人は、夜10時から朝5時まで、ネットでしんどさをつぶやいている子どもたちに声をかける活動を行っている。家出も含めて、子どもたちのSOSを見つけ出している。

相談員は、かつて同じように家出を経験した若者たち。家出中の子どもたちと共感しながら、チャットでやり取りをしていく。必要に応じて、全国の若者団体につなげていく。

ある夜。相談員が言った。

「6分前。東京にいるという女性のメッセージを見つけた」

そこには、「家出してきました」と書いていた。

相談員は、支援する団体が新宿にいることを確認して、「行ってみてください」と発信した。すると、女性から「めっちゃ有益な情報」と返ってきた。

幸重さんは言った。

「彼ら(相談員)は、ほんとにうまいんですよ、我々が(相談を)交代すると、『支援臭』みたいなものを感じるのか、途切れることも。でも彼らは繋がってアドバイスする。大人たちも、『家出の経験のある子どもたち』に学ばなくてははいけない。プロがやったほうがいい、決してそうではないなあ、と思っています」



スタジオ出演した幸重さん(NHK テレビより)

## 顔の見える関係

幸重さんたちは、何かあった時の居場所も作っている。午後2時から夜9時まで。緊急時は、宿泊も可能だ。

集まるのは、家族や学校で悩みを抱えている高校生や中学生。同じ年代の仲間やボランティアとおしゃべりしながら、SNS上にはない「顔が見える信頼関係」を築こうとしている。

ある夜、1本の電話が入った。幸重さんたちが支援していた女性からの緊急の相談だった。親と折り合いがつかず、家を出たい、という内容。女性は、その日のうちに、幸重さんたちの「居場所」にきて、数日の宿泊支援の後、保護施設に身を寄せた。

「こちらの気持ちを察してくれていて、うれしいです」

女性は、明るく話した。

スタジオの幸重さんは、「子どもたちをケアする施設の数はいくらでもありません。限られた一軒家でやっている活動なので、『どんどん来てください』と言うほど、スタッフや資金面で余裕があるわけではない。徳丸さんが言っていたように、本

当にしんどい家のことについては時間をかけてゆっくり関わっていくしかないので、非常に労力がかかる。ひとり一人救っていくほかありません」

## 今後の課題

最後に、今後の課題について山野さんが話した。

山野さんはまず、身近に相談できる場所に政策としてお金が流れるようになっていないことを指摘した。

「公的な機関が開いていない夜の時間に活動している(幸重さんのような)NPO活動も含めて、支援・相談の全体像を見えるようにすることが大切です。予算も出して、国の責任として全体像を明らかにしてほしい」

次に、支援の在り方について、「相談機関をたくさん作ることはない」と前置きして、「相談」という行為は勇気のいることだと認識し、「申請した人だけでなく、すべての子どもや家庭を対象に、何気なく話せる人ができて身近な支援を生み出せる制度設計やアウトリーチできる制度をつくるのが重要」と話した。

3つ目は、「10代の家出」というテーマにかかわる点についてふれた。

「支援やサービスとなるメニューが一番少ないのが高校年齢以上。乳幼児期や義務教育期には『見える化』しているが、高校年齢になると、見えなくなるし、数も少なくなる」と現状を報告。そのうえで、次のように締めくくった。

「こうした放送をきっかけに、『そこに手厚さが必要なんだ』ということが伝わり、政府にしっかり動いていただきたい」

番組には、放送直後から500通をこえるメールやファクスが寄せられた。



## 東大・駒場祭にも出演「若い人のアイデアを」

2021年11月22日、「子どもの貧困をなくすために、私たちにできること～大学進学を切り口として～東大で考える子どもの貧困と社会貢献」が東京大学の学園祭「駒場祭」で開かれた。主催は、子どもの貧困に

問題意識をもって集まった現役東大生による学生団体「CO-Nnext(コネクト)」だ。国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官の濱中義隆さん、認定特定非営利活動法人「キッズドア」理事長の渡辺由美子さん。それに

山野則子さんの3人が、オンラインでパネルディスカッションした。

山野さんは、「子どもたちの9割がストレスを感じていました。大学生の皆さん、考えてください。新たな価値を創造してください。若者発で運動してってください。若い人のアイデアが欲しいんです」と呼びかけた。

# トラウマはこころのケガ



兵庫県こころのケアセンター

副センター長・研究部長 亀岡 智美さん

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、親や子どもにどんな影響を及ぼしているのか。兵庫県こころのケアセンター・副センター長兼研究部長の亀岡智美さんは2021年11月29日、大阪府立大学・大阪市立大学共催「子ども・若者への支援に関する公開講座」の第一部で、オンライン講演した。亀岡さんは厚労省調査の協働研究者で、主に親子調査を担当。ストレスやトラウマ、PTSD（心的外傷後ストレス障害）について解説した。（平田篤州）

阪神淡路大震災（1995年1月17日）の翌年から、神戸市の東部新都心として開発されたHAT神戸（ハットこうべ）。その海沿いの一角に、兵庫県こころのケアセンターがある。災害や事件、事故などによるトラウマ・PTSDなどに関する研究・研修・相談・診療・地域支援・人材育成を行っている専門機関だ。

## 体のケガと同じ、ありふれた体験

「トラウマは、こころのケガです」

亀岡さんは、「まず、トラウマへの共通理解を」と会場に呼びかけて、こう述べた。トラウマの定義について、<本来その人が持っている個人の力では対処できない、圧倒的な（極端にひどい）体験をしたときに起きるストレス>とし、「こころもケガをする。体のケガと同じぐらい、ありふれた体験です」と話した。

続いて、WHO（世界保健機関）と米国ハーバード大学医学部が中心になって行った国際共同研究プロジェクト「世界精神保健調査」を引いて、「様々な国の回答者のうち7割がトラウマを体験し、その数は一生のうち平均3.2回ぐらい。日本の調査でも6割、つまり、半数以上がトラウマを体験している」と言及した。

## シーバーン災害

トラウマが起こる可能性のある出来事として、自然災害、交通事故、犯罪被害、虐待、戦争体験、有毒物質などへの曝露を示した。そして、化学（chemical）・生物（biological）・放射性物質（radiological）・核（nuclear）・爆発物（explosive）の頭文字を取った「シーバーン（CBRNE）災害」を紹介した。

「コロナは有毒物質の曝露にあたりますが、シーバーン災害として考えると、非常にすっきり理解できる。正しく怖がるのが、最も難しいたぐいのものです」

亀岡さんは、シーバーン災害に共通する特徴として、「防護服が要る。感染していないのに感染している、といった猛烈な不安が広がる。社会的混乱が起きて、政府のリスク管理が求められる、医療インフラが打撃を受ける、人心が悪化し行動変容を招く」と説明し、「まさに今、世界が直面している事態です」と話した。

そして、「山野先生の調査でも浮き彫りにされたように、異動や外出の制限によって、家庭内で、もともとリスクが高かったアルコール依存、DV（家庭内暴力）、虐待などのリスクがさらに高まる」と指摘した。

## ウイルス感染自体がトラウマに

こうしたコロナによる2次的なトラウマ以外に、「ウイルスそのものによるトラウマも考えておかなければならない」と強調した。

「大切な人が隔離された。陽性だと言われた。大切な人が、感染者のそばで働いている。子ども自身や家族が、家を離れなければならなくなった。亡くなってしまった」など、ウイルスにまつわるひどいことがあると、ウイルスそのものがトラウマになってしまう、とした。



亀岡智美さん（左上）と厚労省子ども家庭局総務課長の小澤時男さん（左下）。厚労省コロナ調査について講演した。山野さん（右上）もオンライン講義し、大阪府立大学准教授の木曾陽子さん（右下）が進行を担当した。

続いて、精神医学やメンタルヘルスの領域で出されている論文の最近の傾向にふれて「コロナが子どもや青年に与える影響について書かれた論文が激増している」と紹介。文献をくまなく調査し、一定の基準で批評する「システムティック・レビュー」による解析結果で、「コロナが青年期のうつや不安症と関連している」「社会的孤立や孤独感が、うつや不安症のリスクを高めている」ことが報告されている状況を説明した。

## 強さより、持続時間が相関

なかでも注目されたのは、「コロナの強さよりも、持続時間が精神健康と強く相関している」という報告だった。

日本でも学校閉鎖などで子どもの孤独感が続くと、健康リスクが高くなることが示されている。集積した論文では、コロナが、ストレスや不安、無力感、薬物乱用、自殺、学業の問題、欠席などを引き起こすことが指摘されていた。これらの問題は、通常でも、児童青年期の対応として

困難なことであり、感染の恐怖で「自分は死んでしまうのではないかと不安になっている児童の増加も示された。

### ハイリスク群

「山野調査」でも、障害のある子どもの保護者のストレスが高いという結果が出ているが、亀岡さんは「たとえば」として、自閉症スペクトラムの子どもの養育者など、より多くのサポートが必要になっている実態を紹介した。

一般的にハイリスク群として、女性、高齢者、若者、感染者とその家族、医療関係者、「山野調査」でも示されていたもともと不良な社会状態にある人、精神疾患がある人、ソーシャルサポートが乏しい人をあげた。

### トラウマの症状と影響

亀岡さんは、データをオンラインで画面共有しながら淡々と進めた。

トラウマは、非常に広範な影響を与える。起きた直後の反応は、闘争か、逃避か、すくむか。

「これは、危機状態の時に自然に出る反応です。ところが、トラウマが長引いてくると、本当は怖くないんだけど、まるで今、危機状態であるかのように反応が起きてきます」

トラウマの中長期的な影響に、さらにふれた。

「様々な領域、認知や情緒面、行動面、脳の発達、精神健康などに影響を及ぼす。これらは、子どもが成長していく時に非常に重要な領域です。そこに影響が及ぶと、子どもの成長発達が大きく損なわれる懸念が出てきます」

「特に、認知が大切です。物事の捉え方、自分についての捉え方。私はけがれている。恥ずかしい存在だ。世の中全体が危険だ…物事の捉え方がこうなってくると、その後の人生がすべてこの見方で決まってしまう、子どもの人生が否定的、否定的に進むことも考えられます」

### PTSDの診断基準と発症率

トラウマを体験した人が、すべて PTSD になるわけではない。亀岡さんは PTSD の診断基準についても解説した。

「重篤な体験の記憶が、自分の意図とは無関係によみがえってくる。出来事に関する刺激を回避しようとしてしまう。認知や気分の陰性の変化。恐怖の反応がいつまでも進む。覚醒状態になってしまう。これが PTSD の診断基準です」

トラウマの体験のなかでも、「死にそうになった」などの極めつけの出来事を体験した人が症状を示したときに、PTSD と診断される。それが、現在の診断基準になっている。

コロナ（感染）によるトラウマを体験した子どもはどれくらいいるのか、そのな

かで PTSD の症状はどのくらいなのかについても分析した。

「10%の子どもが最低一つのコロナ関連の体験をしている。そのうち PTSD の可能性のある子は 18%。別のレビューによる論文の解析によると、極めつけの出来事を体験した人の PTSD の発症率は 15.9%。おおざっぱだけど、今回の調査の『18%』は、それに負けず劣らずの比率がみられた、ということです」

保護者のメンタルヘルスも調査した。うつや不安は、かなりハイリスクの人たちが多かった。しかも、子どもから見た親についての調査では、ハイリスクの人たちが非常に多かった、という。

### 対応上は3つの要因に注意

今後は、どんな対応が求められるのか。

「シーバーン災害とか感染症にまつわる対応を考える時、3つの要因に注意しなければならないと言われています」

第1が恐怖。目に見えないウイルスへの脅威。全員が検査できるわけでもないし、全員が検査したとしても偽陰性、偽陽性がある。あやふやな状態におかれ、自分が感染したのではないかと人に感染させてしまうのではないかとという恐怖に襲われる。治療薬がない状態では、感染すると死んでしまうのではないかと、という恐怖も感じられやすい。

第2は、社会的孤立。

「ソーシャルディスタンスが言われ、社会的孤立を招く、現に感染者になってしまったり、濃厚接触者として隔離されて社会から距離を置かざるを得ない状況になる。精神健康に有害だと考えられている状態です」

そして、3つ目がスティグマ（レッテル張り）。

感染症に対するスティグマは歴史的に何度も体験してきている。結核、ポリオ、ハンセン病、HIV。こういった目には見えない恐怖が、さまざまな偏見や差別に繋がりがやすい。

「最も恐ろしいのは、自分は厄介者なんだという、自らへのスティグマです。これが、最も怖いところだと考えられています」



大阪府立大学・大阪市立大学共催「子ども・若者への支援に関する公開講座」の第二部。大阪駅前第2ビル6階の文化交流センターホールで行われた

## 今後の対策

膨大な論文が報告されているなかで、亀岡さんは、ハーバード大学が出している **REACH**（リーチ）という対策を画面共有して紹介した（別表）。

「至極当たり前の事ばかりです。まずはこういったストレスやトラウマの問題があることに気づくこと。それから社会的セーフティネットの構築、山野先生もおっしゃったように、本当に困った人に手が届いていない。最もリスクの高い人たちに支援することが必要です」

「レジリエンスを育成する。メンタルヘルスの領域では『心の免疫力』とも言われています。トラウマを被った時に自ら回復していく力。育成するためには、サイコロジカル・ファーストエイドなどが有効です」

サイコロジカル・ファーストエイドは、「適切な応急処置」。深刻な危機的出来事に見舞われた人々に対して、心理的、社会的な支援をするためのガイドラインだ。

「日本でも、災害現場で随分実践されて、共通のコンセンサスを得ています。すぐさま『あなたは病気です』というのではなく、ストレスやトラウマがある、という説明や、いろいろなりソース（医療や看護の資源）を紹介する。そんな対応です」

そして、共感力をもつ。

「対人支援では、最も基本的なことですが、わかりにくいシーバーン災害だからこそ、改めて重要なことだと感じます」

## トラウマインフォームドケア（TIC）

終盤。トラウマインフォームドケア（TIC）を解説した。1990年代に米国で発展してきた、トラウマ支援の基本概念だ。

トラウマを体験する人は、非常に多い。いろんな支援をしていく時に、もしかして目の前の人はトラウマを抱えている人ではないか、ということ念頭に置いて支援していく、という立場だ。

「詳しくは申しませんが、アメリカではすでに立法化して、国家を挙げて推進しようという動きになっています」

そして最後に、TICの基本原則に改めて触れた。

「気づきを高め、トラウマのメカニズムを学んで、コントロール力を高める。

これが安全感を高めることに繋がります。対人支援の現場では当然のことかもしれませんが、とても重要だと思います」

お断り 7面8面9面は、大阪府立大学教育福祉研究センターと大阪市立大学大学院都市経営研究科の共催で行われた公開講座の第1部「コロナ禍における子ども、家庭、学校—2020年度の調査結果から得た知見をどう活かすか」をもとにまとめました。亀岡先生は、新型コロナウイルス感染症について終始、「COVID-19」（コビッド・ナインティーン）と、正確な言葉で伝えられていましたが、紙面では、多くを「コロナ」と表記させていただきました。

### REACH（リーチ）

#### ▼ 問題に気づくこと（Recognize the problem）

パンデミックは非常にグローバルにストレス・恐怖・不安を広げる。

#### ▼ 社会的セーフティネットの拡大（Expand the Social Safety Net）

経済的及び社会的影響から人々を守ることでパンデミックの精神健康への悪影響が低減する。

#### ▼ 最もリスクの高い人々への支援（Assist Those Most At Risk）

DV 家庭や特別なニーズを有する子ども、以前から精神的問題を有する人や孤立状態にある人々への支援が重要である。

#### ▼ レジリエンスを育成する（Cultivate Resilience）

集団レベルでの心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド）などのエビデンスに基づいた戦略を普及させることが必要。

#### ▼ 共感力を持つ（Have Empathy）

自分自身や他人、家族、隣人へのやさしさを積極的に示すことで、自分自身のストレスだけでなく、周りの人のストレスも軽減することができる。

## 生命保険協会大阪府協会などが参画・協力機関となった「山野プロジェクト」が科学技術振興機構（JST）で採択される

子どもの社会的孤立・孤独や社会的排除の問題として、

1. 子どもが声をあげられず周囲が気づかない。
2. 学校組織が教師の抱え込みを生む。
3. 身近な支援が認識されず必要な子どもに届かない。

といった問題がある。また、新型コロナウイルス感染症の流行により、保護者の就業状況の悪化、家族関係の悪化などを含め、ストレスを抱え、社会的孤立となる子どもの増加が見込まれる中、子どもの潜在化したリスクを早期に把握し、適切な支援につなぐシステム活

用は喫緊の課題である。

本プロジェクトのビジョンは、子どもに安心を提供できる、持続可能な社会システムの実現である。

そのための達成目標は

第1に、例えば子どもが貧困を恥ずかしいことと思わなくていい環境創生。

第2に、教師が個人で対処に追われない体制の構築。

第3に、学校として地域資源を知り活用できるようにすること。

である。

実施内容は次の3点である。

### プロジェクト名

「SDGsの達成に向けた共創的開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

1. 学校においてAIスクリーニングの実用化をめざし、スクリーニングシステムによって自動的に上記のことができるようになる。
2. 教育行政・教師・スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザー・地域資源メンバーによるネットワークを構築し関与者の評価キャパシティを形成することで持続可能性を高める。
3. バックアップするために体制構築（養成講座案の作成とモデル実施、個人情報保護ポータルネットワーク対応マニュアルの完成）を行う。

（大阪府立大学のホームページから）

社会福祉法人徳風会 北野田こども園（大阪府堺市東区）

# 「いのち」の3文字に 想いを込めて

## 大寒の誕生会 新成人の卒園児から 写真やメッセージ

大寒の1月20日昼、堺市東区の北野田こども園（徳風会）。1月生まれの園児の誕生会が開かれていた。新成人の卒園児からは、写真やメッセージが寄せられていた。事務室のパソコン画面（壁紙）には「いのち」の3文字（写真）。ある卒園児が、在園していた5歳の時に保育室で書いた直筆だ。母親は、2歳の時に旅立っている。廣谷和子園長は、「いのちが園のテーマです。しんどい時に帰れる場所。そんな園であり続けたい」。（平田篤州）

### 誕生会

毎月の誕生会。コロナの前は全園児（約230人）が集まって行っていたが、今は感染防止のため、クラスごとに開いている。3歳児のクラスをのぞいた。



お誕生会。元気な声でインタビューにこたえた

「お兄ちゃんになったら、何をしたいですか」

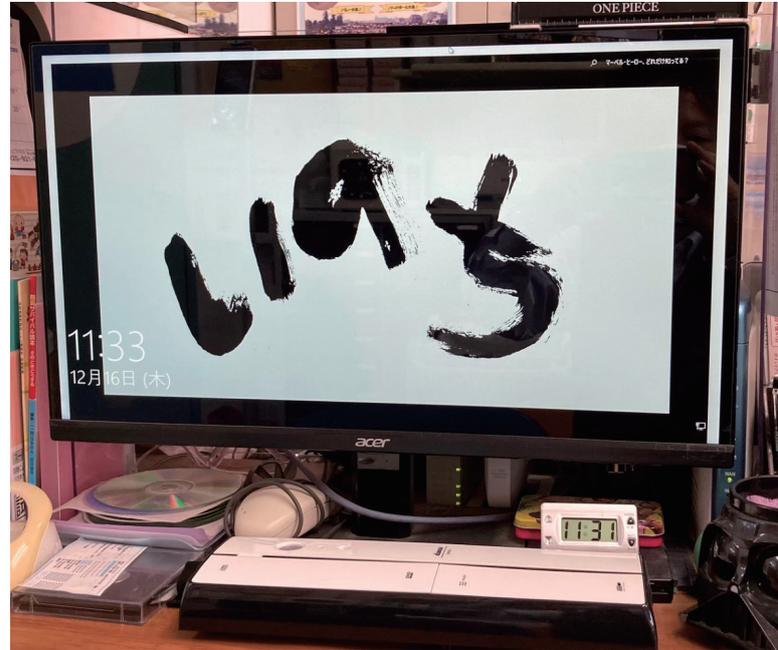
「ブロックでブルドーザーをつくりたい」（拍手）

お祝いを受ける  
3人の園児に、先

生（保育教諭）がインタビュー。絵本の読み聞かせや合唱…。0歳児から5歳児まで、思い思いの趣向で「誕生日」を祝った。

「いのち」は、法人の理念である「生き抜く力」に通じている。

「おうちの人はどれだけ大変な思いをしても、みんなの命を守り抜いてきたし、これからもそうです。当たり前の『今』は、決して当たり前ではなく、いのちという奇跡によってつくられています」



壁紙に園児の直筆の「いのち」を使ったパソコン

園児はそんな話を、真っすぐな瞳で聞く。

### 新成人

玄関のボードに、晴れ着やスーツ姿の写真とメッセージが並んでいた。15年前に卒園した新成人や保護者からの便りだ。

「この時期、苦手なお餅がこれでもかと出てくる餅つき大会を思い出します。無事成人を迎えることが出来ました。特別支援学校の教員を目指しています」

「中学校の卒業式に来賓で訪ねてくださり、とても嬉しかったです。成人の日での晴れ着姿の写真を添付しました」

「専門学校に通っており今年就職します。追伸…身長188cmになりました」

当時の担任の津留孝先生が、新年を迎えて出した祝福のハガキへの返信だ。

「成人式おめでとう、というより、迎えてくれてありがとう。これからもみなさんの生きていく姿『いのち』を見守らせてもらえば幸いです」



廣谷園長。職員のユニホームの袖に「いのち」と刺繍されている



卒園生から送られてきた成人式の写真やメッセージ。園玄関に掲示された

## いのちの旗

廣谷園長は、北野田こども園に赴任して20年になる。その間、「いのち」と向き合う出来事を何度も経験した。

「10年以上前、小学生になった卒園児が事故で亡くなりました。お通夜に行くと、棺の周りに保育園の時の写真が並んでいました。園が、とても楽しかったそうです。『園長先生が来てくれましたよ』。そう話しかけたお母さんの言葉が、今でも耳に残っています」（廣谷園長）。

それからまもなく。今度は、当時2歳だった在園児（男の子）の保護者が30代の若さで病死した。

「園児、そして保護者のいのちまでも…。生きている、って当たり前じゃない。『いのち』を、さらに深く掘り下げる…そんなきっかけになる出来事でした」

廣谷園長は、そう振り返る。母親は、旅立つ直前、園を訪れ、当時の担任に「子どもをよろしくお願いします」と言った。

その言葉を胸に刻んで育んだ。3年後、

園児が5歳になった時、黒の絵の具で「いのち」の3文字を書いた。園では最後となる秋の運動会の直前だった。

「いのち」の文字は、運動会で使う旗になった。その裏の旗面には「頑張って生きてるぞ!」のメッセージ。園児はその旗を持って、退場のクライマックスに走った。

「きっと空からお母さんが見ている」

先生たちは、そう思った。

翌年には、先生や職員のユニホームの袖にも、男の子の直筆の「いのち」が添えられた。事務室のパソコンの画面の「壁紙」が、「いのち」になったのも、そのころだ。

当時の卒園アルバムに、次のような文章が綴られている。

〈いのちは大事。ことばでいうのは簡単だけど、むずかしい。命は奇跡が連続してつながり、喜びをもたらす。その反面、時に儚く、これ以上ない哀しみも、もたらす。ただ、その儚さから、命の尊さ、深さを知り、「生きていることが当たり前でないことを痛感する〉

## 保育は永遠に

卒園児は小、中学生になっても園にやってくる。

「先生、遊びにきたよ」

「おかえり。遊びに?お手伝いに来てくれたんやね」

「はい!お手伝いに来ました」

そんな会話が、和やかに続く。

卒園児が、「先生」や「職員」になって戻ってくることもある。「やっぱり、ここで」と、わが子を入園させる卒園児もいる。

廣谷園長は、保育の役割は卒園後もずっと続く、と考えている。

「しんどい時は、帰っておいで。園におったこと、ひとつでも思い出して、次の一步を踏み出せる、そんな場所であり続けたい」

そして言った。

「いのちの尊さを伝える。それが私たちの使命です。今は空(天国)にいるお母さんや子どもたちも、きっとそれを望み、見守ってくれていると思います」

## Pinポイント インタビュー

山野則子先生



—「いのち」を理念にした保育について

**山野** 悲しい出来事を、子どもたちとうまく共有して、次のエネルギーに繋げている…亡くなられたお母さまも、喜ばれていると思います。乳幼児期の育ちが極めて大切なことは、理論的にも明らかにされています。子どもたちの人格形成期に「いのちの尊さ」を育むことは、とても素晴らしいことです。

—「保育の仕事は永遠」という取り組みをどうみますか

**山野** 地域共生がいわれるなか、改めて注目すべき取り組みですよ。私は、1990年代から堺市で子育て支援のネットワークをつくる草の根的な活動をしていました。その時から「保育園は、卒園後も繋がっている地域の居場所」と思っています。私の娘も卒園後、「園繋がり」で、いろんな機会をいただいています。もっと広がってほしいですね

—認定こども園では、保育と教育が一体となっている。新設される「こども家庭庁」から「教育がはずれる」という懸念の声がある

**山野** 私は「教育と福祉はセットだ」とずっと言ってきたので、教育が「こども家庭庁」の範疇からはずれるとすれば「おかしい」となります。ただ、「こども家庭庁」に権限を持たせて、文科省に指示を出していけるようなスキームも考えられている、と聞いています。「こども家庭庁」は、首相直属機関と位置付けられ、内閣府の外局になる。他省庁に政策の是正を求めることのできる「勧告権」を持つ閣僚を置く、などです。

—こども基本法(仮称)の制定についても論議が進んでいる

**山野** 子どもの権利条約の理念に沿った内容になると考えています。子どもを主語にして、「子どもの最善の利益」を常に優先する、ということです。「こども家庭庁」の動きとともに、国会での審議を注視します。

# つなぎびと

TSUNAGI-BITO

発行：大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所  
住所：〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1  
電話：072-254-9783（山野則子研究室）  
メール：eb-ssw@sw.osakafu-u.ac.jp  
編集：一般社団法人「檸檬新報舎」  
住所：〒541-0046 大阪府中央区平野町2丁目2番9号 ビル血井701  
電話：06-6226-5596  
印刷：株式会社 日章印刷所 電話：06-6306-0481  
「つなぎびと」題字 松田 勤 / DTP 穴地 奈津子

つなぎびとは、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しています。水谷豊会長から、メッセージをいただきました。

## 私たちの願い

一般社団法人生命保険協会大阪府協会  
会長 水谷 豊

### 『つなぎびと』との出会い

生命保険協会大阪府協会では、2017年から『つなぎびと』の発行に関らせて頂いております。発行の浄財は62年続いている、大阪で生命保険事業に関する約2万名の役職員から集めた募金です。生命保険事業は多くの人で助け合う【相互扶助】の精神で成り立っています。

私と『つなぎびと』との出会いは、大阪府立大学SSW評価支援研究所の山野先生の講演を拝聴する機会にも恵まれ、子どもの成長を社会全体で支え助け合い、学校と福祉等それぞれの立場で頑張っている人をつなぐ役割が重要である事を再認識したことが始まりです。

### 大阪府協会の子どもたちへの支援

大阪府協会では1974年から行政の皆様のご協力頂き、大阪府下の児童養護施設へ物品の支援をさせて頂いております。最近の5年間では、野球などユニフォーム・タブレット端末・スイッチ・洗濯機・ベビーベット等、のべ212施設にお届けしました。

毎年施設からは、『スイッチありがとうございます!!みんなで楽しく大切に使います!本当にありがとうございます。』『アイパッドありがとうございます。大切に使います♡受験生なのでタブレットで勉強したいです。』(原文)等、子どもたちのメッセージを頂き、こちらの方が元気づけられます。

この募金活動を通して児童養護施設の皆さんからお話を聞くと 子どもたちの



2021年12月大阪市寄贈式（松井大阪市長感謝状授与）

成長を支えるために 多くの課題に取り組みながら頑張っておられる人の姿があります。沢山の子どもの笑顔や元気な成長がある一方で、いじめの問題、虐待や貧困の問題、心のケア等ひとりひとりと向き合う事が多く、情報連携やスクリーニングの大切さを痛感します。

私たちとして何かできないか? 『つなぎびと』を通じ、SSWの役割や大切さを多くの方に知って頂く事は、大阪府協会一人一人の願いなのです。

### 生命保険のしくみ

生命保険も多くの人で支え合う制度です。保険には万一の死亡保障だけでなく、特定疾病罹患した時に保険金が出る、特定疾病保障保険等、生前給付タイプの保険もあります。もし、子育て中に特定疾病にかかった時、【自分の治療のために、子どもの教育資金を使うか】または【子ども教育資金を守るために、自分の治療をあきらめるか】こんな悲しい選択をすることなく、保険金を受け取って頂き、治療費の一部に充てることが出来るのがこのタイプの保険です。公益財団法人生命保険文化センター HP【<https://www.jili.or.jp/lifeplan/index.html>】にも生活設計情報が掲載されています。

よろしければ参考にしてください。

生命保険は皆様の保険料で支え合う制度です。これからも業界として、子ども達の成長を支える事が出来るように情報の連携など務めて参りたいと思います。

### さいごに

生命保険業界で仕事をするものとして、これからも多くの方々に引き続きのご支援頂き、大阪府協会としても【子どもたちが健やかに成長してほしい】との願いで、社会貢献活動を続けて参ります。

今後とも宜しくお願ひ申し上げます。



子ども達からのメッセージ